

## 論説

賛否両論がある防潮堤整備。気仙沼市が震災復興推進会議に示した

た海岸防潮堤整備の進ちよく状況によると、国、県分を合わせた76地区の計画に対し、6割がおおむね合意、4地区で整備に着手した。半数以上が合意したが、このなかに原形復旧の個所も含まれている。景観が損なわれる、コンクリート壁、高さへの抵抗感が根強いのも事実だ。

これまで各地区で住民説明会が開かれたが、示された資料のイメージ写真は、鳥瞰(ちようかん)図だったり、背後地の木が高過ぎたりするものもあり、「防潮堤が巨大に見えない錯覚を起こしかねない」

という指摘も聞かれる。

本吉町大谷海岸には津波で残った津波警報板に、堤防の高さ9・8mを示した赤い表示がある。生活の場が高台に移り、表示板を見下ろすと高さに違和感はないが、あらためて近くに立ち想像すると、その大きさに息苦しくなる。

### 防潮堤 議論

### 立ち止まる時間は

復旧位置は約2割が海側への「前だし」、約4割が陸側への「引き堤」、残りは震災前と同じ位置か検討中という。大谷海岸でも砂浜を守るため「引き堤」が検討され、近くの沼尻海岸では海にせり出す計画で、住民の生活、憩いの場でもある磯場を失いかねない。

沿岸、河川の近くに住んでいる人の中には、より高くという声も聞く。沿岸漁業で生計をたてている人たちは、防潮堤を整備し一日も早く安心した漁港利用を望む。

防潮堤の高さを基に津波浸水シミュレーションを行い、市が災害危険区域を指定。それに

伴い建築制限、住宅再建支援などを行っており、高さを変えると、危険区域を見直さなければならず別の問題も生じてくる。

また、いつ来るか分からない津波に、生命、財産を守る防潮堤は早く必要という声があるのも事実。防潮堤よりも避難道が先決という

声は早くからあった。景観、磯場などの保護の観点から不要論、高さへの抵抗など、それぞれの指摘は理解でき、意見を一つにまとめることは難しいが、市民の納得できる結論を出してほしい。

避難道整備や背後の土地利用、将来、どのような地域になるのか、するのかなど、トータル的な議論が置き去りにされたまま、防潮堤整備だけが着々と進んでいるように思えてならない。目の前に巨大なコンクリート壁ができてしまっただけでは遅い。

震災から2年が過ぎ、少しは考える余裕が生まれてきた。もう一度、立ち止まって考える時間は残されていないのだろうか。